
Detective Cat -Where is the right answer?-

天海 沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Detective Cat - Where is the right answer? -

【Nコード】

N5938B

【作者名】

天海 沙月

【あらすじ】

Detective Cat 第二弾。クロを無理やり学校に行かせることにしたシロ。しかし、そこで待ち受けていた事件とは……。

プロローグ（前書き）

これは、Detective Catの続編です。ネタバレなどが含まれている恐れがありますので、なるべく、そちらを先に読んでください。

ブローグ

「終わった——！」

誰かが発したその言葉。

うん、終わった。確かに終わった。……色んな意味で。

「司狼^{うしろう}ー、どうだったよ？」

「バッチリバッチリ。完璧にヤマが外れた」

僕は南田にそう答えると、机に突っ伏した。

——定期テスト、終了。

「とか言って、こないだのテスト満点だったじゃねーかよ」

「あれはヤマが当たったんだよ。今回はダメだった」

ヤマかけは、当たるとすごいが、外れると逆の意味ですごくことになる。

それじゃあ、ヤマなんて張らずに、まんべんなく勉強すればいいんだが、当たるか、外れるか？ というスリルが中々楽しい。当たるとすごく気持ちいいし。

……なんか、将来競馬かなんかで大コケしそうな予感……。

「今回も全教科100点いるのかな」

さあな、と僕は答える。

全教科100点。そいつはもう、学校の七不思議の一つと言ってもいいかもしれない。別に、全教科満点を取ることが不思議だといふんじゃない。取ったのが誰かが、わからないのだ。

聞くところによると、入学当初からずっと満点を取り続けているらしい。

しかし、うちの学校は、順位が明確にされないし、廊下に上位の名前が張り出されたりもしないから、名前はもちろん、男か女かさえわからない。全教科満点なんて、相当に目立つだろうし、席の近い人間が見ていそうなものだが、目撃情報はまだない。

まあ、僕にはそんなに関係ないんだけども。

——それに、頭の良い奴なら、すでに知っている。

ヴァイオリンの音色が未だ耳に残る、あの事件を警察より早く解決してみせた、同い年の天才少女。『黒猫』と呼ばれたあいつに比べたら、全教科100点なんて、全然どうってことない。

「テストも終わったし、さっさと帰るとするか」

「だな」

僕は鞆を掴んで、立ち上がった。そうだ、帰ったあと、久しぶりにあいつの家に行ってみるかな。

「ん？」

玄関から出て行く人間が二人、遠くに見えた。後姿だけれど、どうも見覚えがある。

まだ若そうな女性と、コートの下から、まだ新しそうな制服のスカートが覗く、少しウェーブがかった髪をポニーテールに結わえた、小柄な女の子。

女性の方はなんだか、小織こおりさんに似てるな……。なら、横にいる女の子は、クロ？

そこまで考えて、思わず笑いかけた。

クロは引きこもり娘で、外出するのは、事件やその他特別な用事くらいだ。ありえない、ありえない。

でも、見れば見るほど似てる気がする。まさか……ね？

*

『氷鎧ひがの』という表札の掛かった家のインターホンを押す。いや、『家』というより、どう見ても豪邸だよな。

ここにはあれから何回も来ているが、相変わらずの大きさには、まだ慣れていない。けれど、こんなに巨大な家でも、中にいるのは常に二人だけで、多い時でも三人くらいだ。

「はい」スピーカーから、小織さんの声が返って来た。

「あ、立森です」

「わかりました、今お開けしますね」

直後、カチャン、と音がしたかと思うと、自動で門が開く。

「いらつしゃいませ、立森さん」

家の中に入ると、小織さんが笑顔で挨拶してくれた。

小織さんは氷鮑家の住み込みメイドをしていて、ヴァイオリンの名手だ。左手の爪は、今も右手より少し短いまま。きっと、仕事が一段落したあとに時々、ヴァイオリンを弾いているのだろう。おそらく、若き天才ヴァイオリニスト、夕希さんとあの事件を思い出しながら。

「おじゃまします」

そうして僕は、いつもの様にそのまま階段を上がる。目的は、階段を上がって直ぐの、黒猫のプレートがかかった部屋……クロの部屋だ。

コンコン、と部屋の扉を軽くノックする。わかつてはいたけれど、返事はやっぱり無かった。それでも、あいつは必ず部屋の中にいる。答えは単純、クロは引きこもりで、家から出るのは、何か特別な事情か、事件の時くらいだから。

「入るぞー」

部屋に入ると、ソファアで寝転んでいた氷鮑黒羽^{ひがの・くれは}が、ゆっくりと起き上がるところだった。

ソファアの隣に置かれた机には、読み終わった本の山と、これから読む本の山がある。

「久しぶり、クロ」

「……遅くまでコツコツ勉強するタイプ？」

「え？」

いきなりなんだ？ テストのことか？

確かに、昨日は遅くまで勉強してて、本番すっかり寝ちまつたけど……。なんで知ってる？

「手に、鉛筆と赤ペンのインクがついてる」

あ、なるほど。まったく、こいつはホントになんでもお見通しな

んだな……。

「？ お前こそ、今日外出かなんかした？」

クロは怪訝な顔をした。

「いつもより読み終わった本が少ないからさ。どこか行ってたのかなーって」

「……まあね」

「へえ。お前が外出なんて珍しいな。事件か？」

「ううん、ちょっとね。小織さんとか、誰か親しい人が一緒にいてくれば、少しは平気」

ふうん、そうだったのか。

「そうそう、小織さんといえば、今日小織さんとクロにそっくりな人を見たんだ」

「どこで？」

「学校」

誰か親しい人がいてくれれば外出が可能と言っても、参観日でもないのに、教室までついてくるのは難しいだろう。現に、クロは今日も来なかったし。

ところが、クロの答えは意外なものだった。

「ああ、多分それだよ」

「え！？」

な……ホントに？

「さすがに定期テストは受けておかないとまずいのよ……」

「……」

うわあ、なんか今、すっごいリアルな世界を垣間見た気がする。

「でも、教室には来なかったよな？」

「特別教室って知らない？ 体調が悪い人とかがいるんだけど。そこで受けてた。割と退屈だったわ」

——それなら……。

「それなら、普通に学校に来ればいいのに」

「え……」

「少なくとも、学校じゃ退屈することはないぞ？」

いやがりつつも、クロは揺れている様だった。そもそも、どうしてこいつは引きこもりなんかやってるんだ？

なんだか、どっちかというところ——学校に行きたがっているようにさえ見えるのに——。

「一日だけ、ちょっと行ってみないか？ 辛かったら早退していいから」

クロからの返事はない。やっぱり、難しかったか？

「……シロは、」

「？」

「シロは私を、見捨てない……？」

僕には、その質問の意味がわからなかった。わからなかったけれど、

「当たり前だろ」

クロは小さく、頷いた。

結局、このときの選択が正しかったのかどうかはわからない。

けれど、学校にいる間は、僕だって普通の子と変わりないんじゃないか、という錯覚を抱いていた。

事件召喚体質ならびに、事件邂逅体質。

そんな呪わしい能力を、すっかり忘れていた。

プロローグ（後書き）

第一弾からずいぶん経ってしまいました……わざわざメッセージを下さった方、どうもありがとうございます。

第一話：登校初日

朝早く、僕はクロの家のチャイムを鳴らす。

「おい、迎えに来たぞー」

今日は月曜日。クロが学校に行く日だ。ただ、やっぱり一人じゃまだ無理だろうと、迎えにきたわけだが……。

——遅い。直前になって渋っているらしい。

「外は寒いでしょうから、中でお待ちください」小織さんからインターホン越しにそう言われ、僕は家の中に入ることにした。早めに出てきたとはいえ、あんまり長引くと遅刻してしまう。こりゃあ、早めに決着をつけないとな。

小織さんの話によると、支度は既にできているそうだが、まだ迷っているらしい。

「クロ」

玄関から呼びかけてみる。すると、制服姿のクロが顔を出した。あまり袖を通した事がないだろう制服と鞆は、まだ真新しく、他の生徒のように、つるつると光っているところは見当たらな。

「行くか、行かないか、どっちだ？」

「……」

返事は、返ってこなかった。

ゆっくり説得してもいいんだが、ちょっと時間がない。しょうがないな、もう一つの作戦でいくか。

「んー、そうだなー。さすがの氷^{ひがの}鮑様といっても、まだ無理かー」

『無理』の部分をちよつと強調と言う。

「あつ、いやいや、無理やり行くこともないさ。もつとも、今の前じゃ行けないだろううけど」

案の定、クロはカチンときたようだった。よし、かかった！

「……そんなことないわよ」

「強がらなくてもいいんだぞー。今日は休んどけ」

「いい。行ける」

「よし、それじゃあ行くか」

クロがしまった、という顔をしたが、もう遅い。

「ほら」

手招きすると、クロは迷いながらもこっちに来た。うん、もう大丈夫だな。

「じゃあ、小織さん、行ってきます」

玄関ドアを開けると、クロは無言で外へ出て行く。

「行つてらっしゃいませ」

「……行ってきます」

呟くような、小さな声だったけれど、確かに聞き取れた。

「何笑つてるのよ？」

「いやいや」

第一関門クリア。さあ、お次は学校だ。

*

幸いな事に、僕とクロは同じクラスだった。

偶然かもしれないし、クロのお父さんと知り合いだと言う、僕の父さんが、転校してくるときになにか画策したのかもしれない。

教室に向かつて、僕のすりへった上靴とは対照的な、これまた新しい上靴で、クロは黙々と廊下を歩いていく。無表情だが、賑やかな生徒達の声を少し怖がっているみたいだ。

『大丈夫だ』だとか、『友達なんてすぐ出来るさ』だとか、何か励ましてやったほうがいいんだろうか。でも、何を言っても気休めにしかない気がする。

なんていうか……受験生を見守る親ってこんな感じ……？

「無理は、するなよ」

「わかつてる」

そうして、僕は教室のドアを開けた。

「おつ、来やがったな司狼^{しろう}」

「よっす」

教室に入ってすぐ、南田が声をかけてくる。

「？ 後ろにいるのは……」

「あ、えーと」

クロは隠れるようにして僕の少し後ろに立っている。

「――もしかして氷鮑か……？」

え？

振り返ると、クロは苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「知り合いか？」

「同じ小学校だった」

クロの答えはそっけない。

同じ小学校か……。この学校は私立だから、同じ学校からきている人間もそういないだろうと思っていたんだが、やっぱり何人かはいるか。

そのまま、誰が口を開くこともなく、会話が途切れた。

「席どこ？」

つかの間の沈黙を無理やり破るように、クロはそう訊ねる。

「ああ、ええと、通路側から二番目の列の後ろから二番目……」

クロは無言で、自分の席に座った。周りの生徒たちが不思議そうな顔でクロを見る。

「もしかして仲悪いのか？」僕は南田に訊いてみた。

「そういうわけじゃないんだけど……。俺に限らず、氷鮑はいつもあんな感じだったよ」

いつもあんな感じだったって？ クロが？

小学校が同じだったという南田にそう言われても、いまいちぴんと来なかった。確かに、クロは愛想がいいとは言い難い。でも、あれほどじゃなかった。僕が最初にあつた時から今までで、あんな――冷たい目は見たことがない。

「他に同じ学校のやついる？」

「うーんと、池崎だな。他はいないはずだ」

じゃあ、クロの小学生時代を知るのは、南田と池崎だけってことか。その点については、ちょっと安心した。クロは中学にはほとんど行っていない筈だから、学校に行かなくなった『理由』があったのは、小学校の時ということになる。当時を知る人間が少なければ少ないほど、クロの負担は軽くなるはずだ。

——でも、あの池崎か……。

池崎豊は、いわゆる不良と呼ばれる部類だ。過去にクロとひと悶着起こしていても、全然不思議じゃない。あとで、何か訊いてみるか？ ……しかし、すさまじく話しかけずらい奴だな。

僕は、自分の席に鞆を置くと、ちらりとクロの方を見た。

クロは、家から持ってきたハードカバーの本を読み始めるところだった。本の世界に逃げ込むように、クロはページをめくる。多分、あいつは周りへの溶け込み方を知らないんだと思う。

初対面の人間に対しては、誰だって話しかけるのをためらう。仲良くなりたいのに、関わりたくないという矛盾。

うーん、どうしたもんか。

*

その日の授業は、ほとんどがテスト返しだった。

おお、これは……！

見事にヤマが外れたから、まずいとは思っていたが、まさかこれほどとは。うわ、埋められるかも。

クロは、返って来たテストをちらりと見るだけで、退屈そうに先生の話を聞いていたが、やがて本を取り出した。おいおい、授業中に読む気か？ 完全にやる気ないな。

学校に来ていなかったくせに、授業のサボり方はきちんと心得ているようで、先生から見えそうで見えない絶妙な角度で本を読んでいる。

あーあ、どうしょ。やつぱりやめるように言っただ方がいいか？
でも、ちよつと席が遠すぎるな……。

結局、そのままチャイムが鳴って、授業は終わってしまった。休み時間に突入するが、それでもクロは本を読み続けている。

と、隣の席の女子が、そんなクロの様子を上から覗き込んだ。えーと、あれは確か……。

「氷鉋さんって、本好きなんだねー」

突然話しかけられ、クロは驚いてその女子を見上げる。

「あたし、遠野菜子^{とあの・さいこ}。皆はナコって読んでるけどね」

「——そう」

「そう……って、二文字！？ 反応薄いなあー」

遠野の賑やかさに、クロはなんと返したらいいかわからず、戸惑っている。学校にまだ慣れてない状態で、遠野の相手は難しいかもしれないな。——ちよつと手伝ってやるか。

「クロ」

呼びかけると、すぐさまこちらを見返してくる。相当に困ってるみたいだ。

「『よろしく』って言うんだよ」

「……よろしく……」

そう言ったクロは、まだ挨拶の出来ない子供のようだった。対する、遠野は、どこまでも明るい。

「うん、こちらこそよろしくねっ！ 『クロ』って呼ばれてるの？」

何で？ あつ、黒羽だからか！ 私もクロって呼んでいい？ あ

ー、でもクロじゃちよつと猫っぱいなー。じゃあ、氷鉋のひいちやんでどうだっ！」

「……」

ダメだ。明らかに、遠野の喋りについていけない。

それにしても、よく一人で一回にあんなに喋れるもんだと、ちよつと感心してしまった。きつと、遠野は思ったことをすぐに口にさせるタイプなんだろう。さっきの会話を聞く限り、普通の人なら心

の中で考えている部分も、遠野は全部口に出している。

「――別にいいけど」

「ホントっ！？ わーい、じゃあ、今日からひーちゃんね！ 私のこととはさっき言ったとおり、ナコでいいから！ 他の呼び方でもいいよ。あ、でも『金さん』はちよつと嫌かも……。なんで金さんかというと、遠山の金さんなのっ。私は遠野なんだけどさ」

早口でまくしたてるように、遠野は喋る、喋る。でも、不思議と嫌な感じはしない。ただ……。疲れる。

「こら、ナコっ！」

すると、どこからか叱責の声が飛んできた。

「あんまりペラペラ喋るんじゃないの。皆戸惑っちゃってるでしょ」
声の主は、石橋文香。いしはし・ふみか名前に入った『文』という文字とは反対に、誰もが認めるスポーツ少女だ。

「ごめんねーうるさいでしょコイツ。口から生まれてきたに違いな
いから、許してやって」

石橋と一緒にいた、三船がそう言う。三船ゆかりは、みつあみに眼鏡という、典型的な大人しい子、といった見た目だが、話してみると、案外明るい子だ。

「ふふん、人間が口から生まれるわけないじゃん。ったくわかってないなー」

「馬鹿かお前は」

くす、とその場にかすかな笑い声がこぼれた。

遠野と石橋、三船は漫才のような掛け合いをしていて、僕は笑ってない。ということは……。

笑い声の元は、クロだ。

クロが笑ってる――。

くすくす、と二人のやり取りを聞きながらクロは笑う。

「あーちよつと、ひーちゃん、何笑ってんのさー」

「だって、面白……」

普段はポーカーフェイスなクロが笑うのは、すごく珍しい事だ。

——うん、やっぱり、連れて来て正解だったな……。

*

「今日は楽しかったか？」

学校からの帰り道、僕はクロにそう訊ねる。

「まあまあ。そんなに悪くない」

引きこもり娘のそんなに悪くないという言葉は、かなり良かった、
って事と見て良いだろう。

あれから、クロは、遠野だけじゃなく、石橋や三船ともすぐに仲良くなる事が出来た。友達がいるのといないとじゃ、学校生活は全然違う。これできつと明日も学校にいけるだろう。いずれは、そのまま、普通に登校できるようになればいい。クロの学校生活は、まだ始まったばかりだ。

「そういえば、テストどうだった？」

「見る？」

「見る見る」

というか、気軽に人に見せられる点数なのか。これは相当良いと見た。

クロは、鞆から、テスト用紙を取り出した。国語、数学、理科、社会、英語の五教科だ。

「どれどれ……——っ!？」

国語100点、数学100点、理科、これまた100点、社会、さらに100点、当然、英語100点。

つまり、全教科満点。

僕の脳裏に、昨日南田とした話が蘇った。

……入学以来、ずっと全教科満点を取り続けている人がいます。しかしそれが誰なのかは、未だわかっておらず、既に学校の七不思議と化しています。

「おまえかああ——!」

第二話：弾ける日常

次の日、学校に行くクロは、昨日より元気そうで、心なしか楽しそうにも見えた。きつと、遠野や石橋、三船に会ったのが楽しみなんだろう。

学校に行く時間も、今日は昨日と比べて少し早めだ。
が。

「……いないみたいだな」

肝心の遠野と石橋は、教室にはいなかった。でも、机に鞆は置いてある。隣のクラスにでも遊びに行ってるのか？

「あ、ひーちゃんおはよー」声の主は三船だった。

「おはよう」対するクロは、前日に比べどもることなくそう答える。まだ範囲は限定されるが、早くも学校の雰囲気慣れてきたようだ。

「ナコと文香なら朝練だよ。あの二人、バドミントン部なんだ」

へえ、初めて知った。石橋は運動神経抜群だから、バドミントンも得意そうだな。

「ちよつとのぞいてくる？ 二人とも頑張ってると思うよ」

「うん、行く。……シロも」

僕は教室で待ってしようと思ったのに、有無を言わず連れ出された。三船とは仲良くなったとはいえ、昨日知り合っただけだから、少し心細いんだろうけど。

このまま、クロと三船たちがもつと仲良くなればいい。家にひきこもって本ばかり読んでいるより、学校に通った方がずっと良いに決まってる。

クロには、息抜きが必要なんだ。何も考えず、無条件で笑えるような……そんな場所が。

学校が、クロにとってそんな場所になればいい。

何も知らない僕は、その時、勝手にそんなことを思っていた。

*

「おー、やってるやってる」

スパン！ と小気味良い音を立てて、ラケットに打ち出された羽が飛んでいく。さすがは部活、僕がたまにお遊び程度でやっているのとは、音が全然違った。

遠野と石橋は……… いたいた。僕の目から見ても、あんまり上手そうには見えないが、楽しそうにラケットを振っているのが遠野、上級生を相手に屈せず、互角に渡りあっているのが石橋だ。

「ラスト！」

「はい！」

部長の声に、部員たちの返事が続く。さすがは体育会系、女子といえどもかなり熱い。

やがて、各自朝練を終わらせ、片付けに入っていた。

と、入り口付近で見ている僕らに気づき、遠野が手を振ってくる。

「おはよー！ すぐ着替えるから待ってて！」

「早くしないとおいてくよー」

遠野の頼みに、三船がひょうひょうとして受け答えた。

「僕は戻ってるかな」

だって女子の輪の中に一人って、居心地悪いし。

「……」

半歩下がったところで、クロに睨まれた。目線で『行くな』と凄んでくる。

はいはい、わかりましたよ……。

遠野と石橋は、すぐに出てきた。汗はタオルで拭いたようだが、あれだけの運動をした後だ。まだ暑そうだった。

「あれ、これ開かないな……」

石橋がペットボトルのふたを開けるのに苦労している。

「貸してみ」

僕は石橋からペットボトルを受け取ると、ぐいっと力をこめて回

した。先に石橋が開けようとしていたことで緩んでいたのか、ふたはあっさりと開く。

「おお！ 細っこいけどさすが男子っ！」

細っこいは余計だ。

石橋は腰に手を当てて、スポーツ飲料を一気に半分ほど飲みほすと、ぷはーとばかりに手の甲で口を拭った。……オッサンっぽいな？ ペットボトルに元のようにふたをすると、それを小脇に抱え、石橋はポケットからじゃら、とばかりにヘアピンを取り出す。それで髪をまとめようと試みるが、手の中から一本落ちてしまった。

すぐにクロが屈んでそれを拾う。部活の朝練が終わったあとのこの時間、部員や体育館で遊んでいた人々で廊下は混雑していた。ヘアピンなんて小さいものを落としたら、踏まれる前にどれだけ速く動くかが重要になってくる。

「はい」

クロが右手で石橋の服の袖を引っ張って、もう片方の手に乗せたヘアピンを渡す。

「あ、ひーちゃんありがとー」

石橋が微笑んだ。と、その時。

「わっ！」

遠野が飲んでいたスポーツ飲料のペットボトルを落とした。ばしや、とそれはクロの右手にかかる。幸い、横からだったから、制服などはほとんど汚れなかった。廊下は相変わらず人でいっぱいだったが、僕らがいたのは端っこの方だったため、周りにジュースがかった人はいないようだ。

「ごめん、こぼしちゃった！ 大丈夫？ 制服とか濡れてない？」

あつ、手がびしょびしょだよ！ うわ、どうしょー、私ティッシュもハンカチも持っていない……！」

わたわたと慌てている遠野に、はいよ、と三船がティッシュを手渡した。

「まったく、ナコはぼけーっとしてるんだから。ひーちゃん、大丈

夫？」

「全然平気」

クロは自分のポケットからハンカチを取り出すと、それで手にかかったジューズを拭いた。……しかし、そこはジューズの特性。べたべたするんだよなあ……。

「……べたべたするから、手洗ってくる」

「あ、じゃあ私もついでにトイレ」石橋がクロに続いてトイレに入る。

「私も、私もー」

遠野までも、床にこぼれたジューズを拭き終わるなり、一緒に入って行った。もちろん僕は付いていくわけにいけないので、その場に残った三船と待っている事になる。

なんていうか……本当に。

「ホントに仲いいんだな」

僕の顔から、苦笑にも近い笑いが漏れる。それを聞いた三船が、僕の方をじっと見て、口を開いた。

「そうでもないよ？」

「え……」

な——、んだっ、て？

あまりにも予想外な言葉。僕の体は、文字通り、固まる。

「あたしたちは見た目ほど仲良くないんだよ。お互いがお互いを憎んでる、と言っても過言じゃないかもしれない。まあ、多かれ少なかれ、悪い感情を抱いてるんだよ」

「な——」

まさか。冗談だよな？

「でもね、私たちはそれをお互いに知っている」

「！」

「都合がいいから一緒にいるんだよ。学校って集団生活だから、孤

立するのは何かと都合が悪いんだよね」

絶句する僕を横に、三船は口の端に笑みさえ浮べている。

「だからさ」

三船ゆかりはにっこりと微笑んだ。それは——この場にあまりにもそぐわない表情。

「もし——もしこのギリギリのバランスが崩れるような事があったら、その時は——」

そして。

「殺しちゃうかもよ？」

「……！」

「あははははっ、秘密だよ？ ヒ、ミ、ツ。立森ちゃん口堅そうだったからね。でもさ、学校なんてそういう所でしょ？ 今日仲良しだったからって、明日もそうとは限らない。昨日の友は今日の敵、昨日の敵は今日も敵、だよ」

そうだろうか。クロのように、昨日まで顔も知らなかった人間と今日仲良くなっているということだってあるんじゃないか？

「おまたせー」

と、遠野と石橋、そしてクロが戻ってきた。

「もう、長いんだからー。待ちくたびれたよ」

対する三船は、さっきの言葉など嘘のように、笑顔で対応する。やっぱり、さっきのは性質たちの悪い冗談だったんだろうか？ ブラックジョークにしてはあまりに度を越しているような気もするけれど。

三船の、さきほどの言葉と、今の笑顔。真夏の陰影のように、明暗のくつきりとしたその様に、僕は三船の気持ちをはかりかねていた。

*

「にしても、バドミントン部だったなんて、知らなかったな」

南田が呟く。クロが本格的に学校に慣れるまで、休み時間などとはなるべく近くにいろようにしているけれど、女子の輪の中に男一人というのが嫌だったから南田を連れてきたのだ。

「まあ、私は二年からなんだけどねー。文香は一年からずっとだよ」
遠野の言葉に石橋は、ははっと笑った。

「長さだけだつて。まあ、先輩達とは結構仲良くなったかな」

そう言つて、机の中から小さな缶を取り出した。ふたを開けると、ざらつ、とばかりに机の上に大量のプリクラがこぼれだす。

「へへー、すごい量でしょ。先輩達と撮ったやつなんだ」

大小様々なプリクラがあるが、どれも派手に文字やらスタンプやらが施してあり、目がチカチカしそうだ。

それらを見ながら、不意に、クロも普通に学校に来ていたらこういうのを撮ったりしたんだろうか、と思った。

「……ん？」

「何？」

「この人、なんか遠野に似てるな」

それは、他のものに比べて装飾の少ない、比較的地味な一枚だった。石橋と一緒に笑いながら写っているのは、見覚えのない女子だから、きつと先輩なのだろう。

「あー、まだ残つてたか……。そう？ 似てる？」

？ まだ残つてたか、つてどういうことだ？

「うん、似てる。顔全体としてはそんなに似てないけど、耳とか眉毛とか、細かいパーツがそっくりだ」

何だか、見れば見るほど似ているように感じる。まあ、初めて見る人なんてみんな同じような顔に見えるものだけだ……。

「それは浅井先輩だよ。もっとも、もうやめちゃったけどね」

浅井か……。遠野じゃないんだな。そういえば、遠野は一人っ子だつて聞いたことがある。

「これは一年生のときの？」

クロが口を開いた。

「そうだよ。よくわかったねー」

感心する石橋に、クロは別のプリクラを指差した。

「これと背景が同じだから同じ場所で撮ったと思うけど、背の高さが微妙に違ってる。だから去年のかな、って……」

言い終えてから、はっとクロは口をつぐんだ。そうして、目線だけですがよく周りを見回す。

なんなんだ？ 挙動不審なやつ。

「へえ、ひーちゃん良く見てるー！ あったまいいね！ わたしはそいうの全然ダメなんだよー。脳みそちよっと分けて！」

「……」

クロは、遠野の様子を見て、一つため息をついた。呆れだとかそいうのとは違う。なんだか、何かに安心したような、そんなため息。

「……やっぱり変わんないな」

誰にともなく、ぼそりと南田が小さく呟いたのが聞こえた。

「あーおなかすいた！ ちよっと早弁するわ」

石橋が突然叫んで、鞆からアンパンを取り出す。ぱりつと勢い良く袋を開けて、パンにかじりつく。

見事なまでの食べっぷり。こっちまでハラ減ってくるな……。

「ちよっと分けて」

「いいよー」

返事と一緒に、石橋は口の周りについた餡子をぺろりと舐めた。三船がパンに手を伸ばして、反対側、石橋が口をつけていない方を少しちぎって口に入れる。

この光景が、仲良しグループの友人達以外の何に見えるだろう。遠野、石橋、三船の三人からはいつも笑い声が絶えない。さっきの三船はどこまでが本場で、どこまでが冗談だったんだろう？

『殺しちゃうかもよ？』

ずっと頭の中にひっかかっている三船のあの言葉。目の前の光景とあの時の三船のギャップがあまりに激しくて、確かめるように何回も反芻しているうちに、あれは嘘だったんじゃないかと思えてくる。あんなの、僕の頭の中の夢か何かで、現実と区別がつかなくなっているだけなんじゃないかと。

だってそうだろう？ ましてや一介の女子中学生のどこに、人を殺害する理由があるっていうんだ？

僕は多分疲れてるんだ。うん、そうに違いない。なんたって、つい最近殺人事件に出くわしたばかりだからかな……。

「——ん」

突然、石橋が喉を押さえた。

「石橋？」

「がほッ！」

ひゅう、と鋭く息を吸い込む音を間に挟みながら、石橋は激しく咳き込む。喉の奥から搾り出すような、ひび割れたように枯れた音。

「文香？ 大丈夫？」

椅子に座った石橋の体が、ぐらりと傾いた。口を押さえた指の間から、何か紅い液体が垂れる。

ぼた、ぼた。それは、教室の白い床に奇妙なコントラストを作り上げた。

なんだこれ？ 僕はそれを見たことがある。何回も何回も。でも、知りたくない。体が理解する事を拒否している。なんでよりによってこんな場所で——どうして——。

どうして血が。

「文香！」

椅子のたてる甲高い音と共に、石橋は床に倒れこむ。

苦しげに見開かれたままの目、真っ赤に染まった掌。

咳はもう——していない。

日常が壊れる瞬間なんてものはいつもありに突然で唐突で。

何日も、何週間も、何ヶ月も何年もかけて、やっと積み上げてきた日々は、皮肉な事に数十秒、異質なことが起こるだけで、あっけなく陥落してしまうのだ。

僕は、石橋を見下ろす。

今更のように、誰かが悲鳴を上げた。一体、何が起こったっていうんだ？

——ああ、そうか。

頭の奥で、何かがぱりんと小気味良い音を立てて弾ける。

僕の日常は、粉々に崩れ去っていた。

第三話：拒絶

「と——りあえず、保健室……」

南田が無理やり口を開いて、なんとか喉から声を絞り出す。

その声で僕は、はつと我に返った。何放心してんだ？　こんなの、前にもあつたじゃないか。そうだ、今までにだってたくさんこんな場面を見てきた。今更——。学校のクラスメイトだからって。

「石橋、おい石橋！」僕は動かなくなった石橋に近寄って、肩を掴んでゆさぶる。石橋は人形のように、かくかくと揺らされるままになっでいて、自発的な動きは一切ない。

床に投げ出されるようにして倒れた体に繋がっている、血まみれの手。僕は石橋の手首に指を当てた。けれど、いつまでたつても、健康な人間ならば、すぐに指先を押し返してくるだろう拍動が感じられない。脈がない。

「——」

なんでだ？　ここは学校だろ？　どうして学校で人が死ぬ？

『殺しちゃうかもよ？』

僕は三船の方を振り返った。

三船は、口を押さえて体を震わせている。遠野も似たようなものだった。そうだ——クロは？

「……シロ」

クロは僕に訊ねる。

「死んでる、の？」

認めたくない。信じたくない。けれど、僕はただ、頷くことしか出来なかった。

「……」

クロは、何も言わず、何の反応も示さず、静かに目を伏せた。そ

れは、ある意味この場で最も異常な反応かもしれない。無表情に、無感動に、全ての感情を拒否しているかのような――そんな雰囲気。先ほど誰かが上げた悲鳴を皮切りに、騒ぎはあっという間に伝染し、教室内は大混乱だった。

不良と呼ばれている池崎でさえ、顔を引きつらせている。

ああ、嫌だ。

この空気、この空白。

さっきまで生きていた人が急にいなくなる、莫大な虚無感。

死の瞬間だけは――きつと、いつになっても慣れることなどないのだろう。

*

事件の事を知らされた警察の到着は早い。もつとも、今の僕は事件のせいで時間の感覚が追いつかなくなっているので、実際はそんなに早くないのかもしれないけれど。

「酷いな……学校で殺人なんて」

「ああ。でも、きつと警部なら解決してくれるだろうよ」

「そうだな。まだ20代前半なのに凄いやあの人は」

20代前半の警部だって？

まさか……。いや、20代前半の警部だってキャリアならばおかしくはない。他にもいるはずだ。

あいつだとは……限らない。

「シロ？」

カツ、カツ、と規則正しい靴音が廊下から響いてくる。

そしてそれは、不意に途切れた。僕の目の前、この教室の、前で僕はドアを見る。ドアの手前の廊下に立つ人影を、見る。

そいつは、林檎のように赤い唇に笑みの形を浮べた。

「お久しぶりね」

「……」

梶浦響。かじうらひびき

僕が前に住んでいたところで知り合った、優秀な女性警部。

僕の、天敵。

「会いたかったわ」

「僕は別に」

自分でも驚くほどの、冷たくて硬い声で僕は答える。

そんな僕の態度に、梶浦はわざとらしく肩をすくめた。そういう余裕そうな態度が、余計に僕の神経を逆撫でする。

梶浦は石橋を見下ろす。

「吐血はしているものの、争った後や、目だった外傷はないわね……。毒殺かしら？」

「おそらく」

「被害者の食べたものや飲んだものは覚えてる？ 直前に被害者と一緒にいた人は？」

「朝、部活が終わった後にスポーツ飲料を500mlペットボトル半分と、死ぬ直前にアンパンを少し。ペットボトルはフタを開ける前の状態で、僕が開けた。アンパンも未開封のものだ。直前に一緒にいたのは、僕と、遠野菜子、三船ゆかり、南田あつし、氷^{ひがの}鮑^{くれは}黒羽だ。」

僕が覚えている限りの事を言うと、梶浦はふうん、と相槌を打った。

「厄介ね」

「え？」

「だって、ペットボトルもパンも未開封なら、あらかじめ被害者の口にするものに毒を仕掛けておいた可能性が低くなる。注射器か何かを使って、袋の上から毒をパンに入れるなら話は別だけど、人の大勢いる学校でそれを実行するのは結構難しいわね。被害者は女の子だから、なおさら。女子はグループで行動するものだもの。それに、袋に穴が開いていたら誰か気づくはずだわ」

それだけじゃない。

石橋は早弁するつもりでパンを持ってきたが、早弁するかどうかはもちろん、今日の石橋の弁当がパンかどうかということさえ、事前に知ることは容易じゃないのだ。

何せ、毎日弁当箱入りの手作り弁当をもってきている人だって、作っている人が寝坊でもすれば、その日の弁当は自動的にパンになる。寝坊するかどうかは、本人でさえわからないのだ。他人が知るはずがない。

という事は、石橋がパンを持ってくるかどうか、ということは犯人にわからないわけだ。じゃあ、毒はペットボトルに……？ いや、未開封のペットボトルに毒を仕掛けるのはパンよりずっと難しい。注射器を使おうにも、内容物が漏れ出してしまうからだ。

じゃあ、犯人は、いつ、どこに毒を仕掛けたんだ——？

「……………」

駄目だ。僕じゃわからない。

でも、クロなら——。そう思って、はたと気づいた。

クロが静かすぎるのだ。

最近口数が少ないのも、クロがまだ学校に慣れていないせいだと思っていた。

だが、氷鉋黒羽の本質は、『黒猫』の異名を持つ探偵だ。

クロは普段あまり喋る方じゃないし、家で本ばかり読んでいるが、事件となると、積極的に動き回って調べ始める。自然、口数もいつもより多い。

そのクロが。

じつと動かず、事件の謎を調べることもなければ、捜査に口を出す事もしないのだ。

「クロ？」

僕は呼びかけてみる。けれど、クロからの返事はない。

「どうなんだ？ 今回の事件。また前みたいに解決してくれよ……。」

このままじゃ、石橋が——」

石橋があまりに、浮かばれない。

けれどそれは、僕にとって最も予想外の反応だった。

クロは首を振ったのだ。――縦ではなく、横に。

「嫌」

「!？」

顔をゆがめたクロは、唇を動かして、次の言葉を紡ぐ。僕の予想に真っ向から反した、その言葉を。

「推理したくない」

第四話：選択

『推理したくない』

「な……」

一瞬、クロの言葉の意味を理解することが出来なかった。

当然だ。何故クロがそんなことを言い出すのか、皆目見当がつかない。推理は、クロにとって呼吸をするのと同じくらい当たり前で、大切なことの筈なのに。

なんでだ？ どうして推理を嫌がる？ いつもと違うところなんて特に……。

いや、一つだけ。一つ、大きな相違点がある。

「——『学校』？」

まさか、学校だからなのか？ そういえば、石橋のプリクラを一年前のものと当てたとき。あのくらいの推理ならいつものことだ。でも、そのときのクロの反応はどうだった？

僕は自分の記憶を辿っていく。幸い、すぐ思い出すことが出来た。そう——石橋が死ぬ直前。

クロはプリクラを去年のものと言ったあと、はっと口をつぐんで、目線だけで素早く周りを見回したんだ。

あの時は、拳動不振な奴だと思っただけだったが、あのときクロは明らかに何かを気にしていた。推理することと関連する、何かを。ということは、僕の知らないクロの過去——小学校時代に何か関係があるんだろうか。

「南田！」

クロと同じ小学校だった南田なら、何か知っているかもしれない。

「どうした？」

「クロ……氷^{ひがの}鮑について、知ってることを教えてほしい。小学校時代に何があつたんだ？」

「何があつたつて言われても……」

南田は暫し黙つて考えこむ。そして、ふつと何かに気づいたように顔を上げた。

「嫌がらせを受けてたな。池崎とかから」

池崎。そういえば、こいつもクロと同じ小学校出身だつて。不良の池崎と、クロ……。関連性がわからない。直接訊いた方が速いな。

「池崎」

「うわっ！」

後ろから近寄つて話しかけただけなのに、池崎はすごく驚いた声を上げた。

「な、なんの用だ」

「氷鮑黒羽と同じ小学校だつたよな？」

「は？　それが俺に何の関係があるんだよ」

「氷鮑に嫌がらせをしてただろう？　なんでやったんだ？」

池崎は再び、は？　と間拔けな声を出した。

「いいから」

僕は池崎を睨むようにして先を促す。相手は不良だというのに、我ながら大した態度だ。

更に距離を詰めようと、じり、と体を動かす。

「寄るんじゃねえよ！」

「言ってくれたらどこへでも消えるさ」

池崎の反応は少し異常だったが、今は都合がいい。

「……氷鮑はチクリだつたんだよ」

「チクリ？」

その言葉は結構な予想外だった。チクリって、生徒間の悪ふざけを先生に密告したつてことか？

「例えば誰かが花瓶を割つたとすると、いくら隠そうとしても、必ず犯人を当てやがるんだよ」

「……」

——ああ、そうか。

クロは、当時から既にどうしようもないほどに『探偵』だったんだ。謎を見つけると解かずにはいられない、いや、解くことが当たり前——そんな性質の。

クロは謎を見る。そして、『黒猫』の頭脳をもってしてそれを解く。

ここまでは何ら問題のない、クロにとって当然の流れ。ただ——この後。＜謎解きの答えを誰に教えるか＞が問題だったんだ。

おそらく、まだ小さかったクロは、自分の内に答えを秘めておくことが出来なかったんだろう。それとも、周りが答えを望んでいるのに、わざわざ隠す必要はないと思ったのかもしれない。

とにかく、クロは答え——犯人を他人に教えてしまった。

多分、先生はクロのことを褒めただろう。だが、生徒は違う。犯人側なら尚更だ。

そうして、池崎達の嫌がらせに発展した——。

「……」

僕は一つため息をついた。

そういう経緯があって、クロは学校で推理することを怖がるようになったんだろうな。

推理することだけじゃなく、学校に行くことさえも——。

「それじゃ、どうも」

僕は池崎に軽く手を振った。と、池崎が顔をひきつらせる。

「……あ」

さつきから一体なんなんだ、とてのひらを見て気づいた。ほんの少し、石橋の血が付いていたのだ。さつき石橋の脈を確かめた時にも付いたんだろう。

なるほど、池崎は血だとか死体に怯えていたわけだ。不良と言われているとはいえ、こういうところは普通なんだな……。

「……だよ、お前」

「え？」

「なんなんだよお前！ 殺人事件が起こったんだぞ！？ 人が！」

それも同じクラスの人間が死んだつてのに、なんで平気な顔して氷鉋のことなんか訊いてんだよ！」

僕は、自分でも驚くほどの冷たい目で、池崎を見た。途端、相手が怯むのがわかる。

別に平気なわけじゃない。

でも、仕方ないんだ。そういう体質なんだから。

事件を呼び寄せて、遭遇してしまう——まあ、そういうことだ。

だから——完全に慣れてしまったといえは嘘になる。

もう割りきったなんて台詞は只の強がりだ。

だけど。僕は、もう怖がったりしない。

僕にはクロのように、事件を推理する能力ちからはないし、事件に出くわしても何もすることが出来ないけれど、怖がって出来ることもやれずにいることはもうしない。

そして、今僕に出来る唯一のことは——クロに発破をかけることだ。

「……クロ」

相も変わらず無言だったが、クロは頑かたくなに推理することを拒んでいる。

「僕が代われるなら、とつくにやってる。だけど、こればかりは無理なんだよ。お前じゃないと出来ないんだ」

もちろんクロが推理を嫌がる理由は、過去のことだけじゃないだろう。

だって、犯人はあの三人——遠野と三船、そして南田の中にいるだろうから。

僕ら今日、石橋とほとんど一緒に行動していた。そして、遠野菜子、三船ゆかり、南田あつしも同じく。

それだけじゃない。全員、友達なんだ。

クロの最初の、友達。

「このままじゃ……石橋があまりに浮かばれない」

「——」

クロの表情が、わずかに揺れた。

僕は今ずるいことをした。石橋だってクロの最初の友達だ。石橋の名前を出せば、クロの気持ちが揺らぐと、それをわかっていて。けれど、その時僕は、何がなんでも犯人を見つけ出さねばならないと思っていた。石橋のためにもそうしなければならないと、そう、思っていた。

お互い黙ったまま、長い長い静寂がその場を満たす。

「……わかった」

「！」

その言葉は唐突で、クロが返事をしたのだと気づくまでに多少の間があった。

「思考の材料があと少し足りない。手掛りがもう少し必要なの。今日あったことを朝から手短に説明してくれる？」

「あ、ああ」

完全に、『黒猫』のスイッチが入った。僕はクロに説明するため、朝の様子から順番に今日のことを思い出す。

「ええと……。まず教室に入ると三船がいたな。そして、遠野と石橋の朝練を見に行って……。部活が終わって教室に戻るときに、石橋がペットボトルのジュースを飲んだ。そういえば、遠野が溢してクロに少しかかったつけ。そのあと休み時間に早弁だと言って石橋があんパンを食べてた。そのあと、石橋が倒れたんだ。ちなみにペットボトルとあんパンはどっちも未開封だった」

短くまとめればこんなところだろう。

クロは目を閉じて考え込んでいる。

「ああ……。そういうことか」

と、突然一人納得したように頷いた。

クロはじつと黙って佇むばかりだったさっきまでの様子が幻だったかのように、すたすたと警察や三船たちが集まっているところ――石橋の遺体の方へと歩いていく。

「どけて」

遠野に言つと、説明がしやすいように。クロは事件現場の真ん中に立つ。

「ここからは私の仕事だから」

そう言つて、ポケットから取り出した手袋をきゅ、と力強くその手にはめた。

けれど、僕は未だにわからない。

この時のこの選択が、果たして正しいものだったのかどうか――。

第四話：選択（後書き）

大変更新が遅れてすみません。ようやく時間が取れるようになったので、頑張って更新していきたいと思います。

第五話：代償

倒れた石橋の周りに佇んで、警察と一緒に状況を見守るのは、僕とクロの他に、三船、石橋、南田の三人。

三人とも、明らかに動揺していて、別段怪しい点はない。

でも、かの名探偵ポワロも言っていたはずだ。犯罪者というのは、同時に、一流の女優、男優なのだと。

「わかったのか？」

僕の問いに、クロは頷いた。「まず、毒の付いていた場所は――」
「す、とクロは石橋を指差す。」

「服の袖」

「！」

その場の全員が、クロの言葉に反応し、一斉に石橋の袖へ注目が集まる。

「……鑑識へ回しておいて」

梶浦の声だけが冷静に響いた。鼻持ちならない奴だが、警部であることは確かだ。

「犯人は前もって毒を石橋文香の服の袖に塗っておいた。部活の朝練があつたから、ジャージから着替えようと制服に袖を通した時に手の甲に毒が付く。そのあと、部活の後の水分補給にジュースを飲んで手の甲で口を拭いてしまった。これで罠の設置は完了。口に毒が付いた状態だから、後は文香の行動次第。何かの拍子に唇をなめれば死に至る……。おまけに、時間を予測することは誰にも出来ない。そうして口に毒が付いたままあんパンを食べて、口の周りをなめた時に餌と一緒に毒まで飲んでしまった……というわけ」

そうだ、石橋は確かに、ジュースを飲んだあと手の甲で口を拭いていた。

まさかあの時既に、手の甲に毒が付いていたなんて。

「そんな……」

「そして、制服に毒を塗ることが出来たのはただ一人。同じ部活だった——遠野菜子。あなただけよ」

クロの発言に、皆は一斉に遠野の方を向く。

「ちょ……ちょっと待ってよ」

「もし私が毒を持っていたとして……気づかれずに毒を塗ることができるの？」

こくり。クロはこともなげに首を縦に振った。

「この学校の更衣室はロッカータイプじゃなくて、普通の棚だから、手に取った制服が誰のものかなんて、置く瞬間を見ていない限りわからないわ。より万全を期すなら、時間帯をずらせばいい。朝練に遅刻するとか、練習中にジャージの上着を置く、だとか言って更衣室に入れば、周りは練習中だから、更衣室には誰もいないはず。毒を仕掛けても……目撃者はいない」

「……！」

遠野は大きく目を見開いて——そして、小さく微笑った。

「ひーちゃんってホントに頭いいんだね。探偵さんみたいだよ。でも、それだと、私じゃなくても毒を塗ることは可能だよ？ 同じ部活の人なら、誰でも出来ることになる」

遠野の言うことにも一理ある。大抵の人間は制服のポケットに生徒手帳を入れているだろうから、石橋が制服を置くところを見ていなかったって、しらみつぶしにポケットをあさっていけば、石橋の制服を見つけることだって誰にでも出来る。同じようにして毒を塗ることだって……不可能じゃない。

僕は、今日石橋と一緒に行動していたのが、三船と石橋、南田だったから三人を疑った。けれど、犯行が僕が見ていないところ——部活中に行われていたのなら、他にも怪しい人物がいることになる。「私がやった、っていう証拠でもあるなら、話は別だけど」

「ジューズ」

証拠を求める遠野に、クロは間髪入れずにそう言った。

「体育館から戻ってくるとき……ナコはジューズをこぼした。それ

は私の手にかかって、床以外、他に濡れた場所はなく、廊下は混雑していたけれど、通行人にかかることもなかった。あのとき少し不審に思ったの。『こぼれ方が綺麗すぎる』って」

「え……」

「そうなる、考えられることは一つ。あなたはわざとジューズをこぼした。私の手を洗わせるために！」

クロの手を洗わせるため。遠野がジューズをこぼす直前、何があったっけ……。

それ以上思い出そうとする必要はなかった。それは、クロが全て説明してくれる。

「別に、濡れたところをハンカチやティッシュで拭かせるだけでも構わない。とにかく、あなたは私の手についたものを落としたかったの。そう、落ちたヘアピンを渡そうとして、私が石橋文香の袖を掴んだときについたものをね」

「——」

そうか。石橋の袖を掴んだときに、クロの手に付いたもの——それは紛れもなく、『毒』。

遠野は苦しそうに眉根を寄せる。口を開いて何か言おうとするが、言葉が出て来ず、空回りするばかりだ。そして。

「あはははは！　すごいなあ、ひーちゃん。本当にすごい。その聡明な頭脳に可能な限りの賞賛の言葉をかけたいね」

突然、遠野は笑い出す。それよりなにより、僕が驚いたのは聡明、賞賛といった単語。普段のおしゃべりな笑い担当という役回りの遠野からは、まず出てこない類の言葉だ。そして、その言葉が遠野がけして馬鹿ではないことと、今までの遠野が本来の遠野菜子ではなかったことを充分過ぎる程にもの語っている。

「降参するよ。あなたの前じゃ何を言っても無駄だろうからね……。まさかジューズのことでボロが出るとは。いやはや」

ふざけているような口調と表情だが、遠野の目はちっとも笑っていない。その部分だけが冷静に周りを見回していた。

「……一つ訊きたいんだけど。ジュースをこぼしたなんていうのは、証拠としてはまだ弱い。その程度なら、毒のことなんか全然知らなくて偶然に手を滑らせた、って言っても通るかもしれないからね。もし私がこうやって反論を諦めて罪を認めなかったら、どうしたの？」

訊ねられたクロは目を伏せて、淡々と答えた。

「別に。ナコはここで認める。そう思ってたから」

「まったく、かなわないなあ……。ひーちゃん存在は予想外だったよ。久しぶりに学校に来た登校拒否の女の子。どうせなら私のアライバイの証人になつてもらおうと思つたのに……。それがこんな名探偵だったなんてね。最後の最後でしくじっちゃった」

遠野の言葉は少し自嘲気味にその場に響いた。

「何で……こんなことを？」

無意識に、僕は遠野に問いかける。三船は否定していたけれど、僕の目から見る三人はとても仲が良かった。それに、殺意がわくのと、それを実行するのではまったく違う。遠野は、石橋の机に散乱したブリクラを見やり、一枚を手にとった。

「浅井先輩……？」

それは、石橋と浅井先輩が写った一枚。ぱつと見た感じの雰囲気は全然違うが、細かいパーツに注目すると、やはり遠野によく似ている。

「この人ね、私のイトコだったんだ」

従姉妹^{いとこ}。それでよく似ていたのか。僕は一人納得する。でも、「だった」って……？

「すごく優しい人で、文香と同じバトミントン部だった。——なのに。去年の暮れにね、自殺、しちゃったんだ」

「！」

自殺。思つてもみなかつた単語に、僕は目をみはる。

「私は本当にショックだったよ。辛そうな様子も見せなかったし、そんなことする人には思えなかったから。……だから私は、独自に

調べ始めた。そう、同じバトミントン部に入ってたね……」

そういえば、一年からいた石橋と違って、遠野は二年から入部したと言っていた。

「別に復讐がしたかったわけじゃない。ただ知りたかっただけなの。名字が違ったし、顔も似てなかったから、私がイトコだって気づく人はいなかったよ。似てるなんて言っただのは立森君が初めて。びっくりしたなあ、あの時は……」

遠野は懐かしむように目を細める。まるで、そうやって話していたついさっきが、遠い昔だったかのように。

「それで……ある日、知ってしまった。里沙ちゃん——浅井先輩の自殺に関わった人達を。原因は、イジメだった。これはわかった。学生が自殺なんてする理由はそれくらいしかないから。ただ……」
そこで一度言葉が途切れる。ぎり、と遠野が手を強く握りしめたのがわかった。

「ただ、それに文香が関わってたんだ」

三船が息を飲む。ただクロだけが、動揺した様子も見せず、遠野を見つめていた。

もしかしたら、クロには既にわかっていたのかもしれない。『謎を解くには、謎を知れ』。

謎を理解すれば、答えや犯人は自然と付いてくる。ただし、全てを理解するという条件と一緒に。それは犯人の心情や理由まで——全部。

「戸惑ったよ。本当に、本当に。私は文香のことが嫌いだったけど、大好きでもあったから」

それを聞いた三船が微かに驚いた様な顔をした。三船にとっては、自分たちの誰かと誰かの間に『大好き』等という言葉が出るのは信じられないのだろう。

「文香は運動神経が良かったから、そうでない人のことなんてわからなかったんだろうけど……。それから、わからなくなった。文香とどう接していいか。従姉妹^{いとこ}の復讐とかそういうんじゃない。ただ、

わからなかったの。どうしたらいいかわからなかった。今まで通りに戻ることもなんて出来なかった」

喉から絞り出される、消え入りそうにか細いその声は叫ぶ様で、もういいよ、と言ってやりたくなかった。

けれど遠野はそれを望んでいない。誰も遠野を止めることはしない。出来ない。

「それで、思った。文香がいなくなればいいんだ、って。そうしたらこんなに悩む必要はなくなるんだ、って。だから、殺すしかない。……！」

水を打った様に静まる室内。誰も何も喋らない。遠野の鳴咽おえつだけが、耳に響いた。

『殺すしかなかった』、と遠野は言った。

そうだろうか。他にいくらでも方法があったように、僕には思えるけれど。

*

疲れきった様子の、クロの表情。

本当に、これで良かったんだろうか。

僕は、事件は推理して解決しなければいけないものだと思っていた。

でも、この事件は解決して良かったんだろうか？

遠野は、クロの学校で出来た最初の友達だった。石橋と三船も同様に。

もし、もしクロが推理をしなかったら。

遠野の犯行は、いずれはばれたことかもしれないけれど、少なくとも、クロが推理で傷を負う事はなかった。クロが、また見なくてもいいものを見る羽目にはならなかった。

それにも、遠野の行為がばれなかったとしたら——。そしたらきっと、しばらくはショックが抜けないかもしれないけれど、時間

が事件を押し流せば、僕らはほぼ今までどおりの生活を送っただろう。

こうやって、全てがバラバラになってしまうことはなかった。もちろん、遠野のしたことは許されないことだ。

それでも――。少しでもそう思ってしまうのは、僕の弱さなんだろうか？

「ひーちゃん」

遠野が、警察と一緒に教室を離れる直前、振り返ってクロに声をかけた。

苦しそくに顔を歪ませるクロとは対照的に、遠野は、微笑っていた。

「捕まえてくれて、ありがとう」

*

「見事だったわ。協力どうもありがとう」

梶浦がクロに礼を言った。対するクロは別に、とだけ。

「そしてあなたも……ね」

「僕は何もしてませんけど」

「事件を連れてきてくれたじゃない」

僕は梶浦を睨む。事件に巻き込まれなくて巻き込まれている訳じゃない。

「私は上に行く。そのためには利用させてもらうわよ……。なんだってね」

梶浦はくるりと背を向けると、後ろ向きのまま軽く手を振った。まったく、どこまでも……。

「もしかして、あの子が『黒猫』なの？」

梶浦は近くの警官に指示を飛ばしながら、クロのことを尋ねた。

『黒猫』。それは、事件を解決するうちにクロに与えられた二つ名だ。

「ああ、そうです。制服だったから気付かなかった。あの子もまだ子供なんですよね……。ん？ 隣の子、見覚えがあるな……」

「『黒猫』さんの隣の彼？ 彼ならこれからいくらでも会うことになるわよ。事件や事故の現場でね」

「……？ どういうことですか？」

後ろ向きで顔は見えなかったけれど、僕には梶浦がにやりと笑うのがわかった。

「事件召喚体質ならびに、事件邂逅体質。簡単に言えば、事件に偶然出くわしてしまう……。そういう類の一種の才能よ」

「才能、ですか」

「ええ。これは才能。只の凡人には特殊な事件に遭遇する権利さえ与えられないのだから。とんだ災能さいのうね」

まったく、どこまでも人の神経を逆なでする奴だ。

人を苛立たせることに関しては、梶浦に勝るものはいないだろう。

くい、と袖を引かれて、僕はクロの顔を見る。

こういう時、なんと言ってやればいいんだろう。

お疲れ様？ ごめん？ それともありがとう？ 何を言っても、

意味がないような気がして、かける言葉がみつからない。

だから、僕はこう言うしかなかった。

「帰ろう、クロ」

無言のままに、クロが頷いた。

エピローグ

あれから。

遠野が罪を認めていたために、捜査は比較的楽に進んだらしい。事件に使われた毒が発見され、それが決定的な証拠となったようだ。

遠野がこれからどうなるのかは、僕は知らない。けれど少年院の収容年齢はおおむね12歳からだ。遠野は14。だから多分、とは思う。

教室はいつも通りのように見えた。

ただ変わったところといえば、遠野がいなくて、誰が置いたのか石橋の机には花があつて。

三船は、別のグループの女子と一緒にいた。

でも、遠野と石橋といったときの方が三船が楽しそうに見えたのは、気のせいだろうか。

三船はこれからそのグループに溶けこんでいくんだろう。本来の気の合う友達かもしれないし、もしかしたらまた、特に好きじゃない人達なのかもしれない。三船は多分、一人でいるのが怖いんだと思う。

三船にとって友達とは、一人じゃなくなるために必要なものなんだろう。友達なんてそんなものなのかな……。

はあ、と僕は大きく息をついた。

思った以上に、事件のことを引きずっているらしい。

いい加減落ち着け、自分。今までだってよくあったことの筈だ。

ただ、今回は身近な人が犯人で被害者だっただけで。

「……狼、司狼」

「え？」

南田だった。いつの間にか隣に立っていたようだ。

「大丈夫か？」

「？ 何のことだよ？」

「とばけんなよ。遠野と石橋のこと」

「……」

図星を突かれて少し動揺してしまった。もちろん南田はそれを見逃さない。

「お前は大丈夫じゃない時に限って平気だ、って言うんだよね……。何我慢してんのか知らないけどさ、きついときは堪えなくなっっていんだぜ？」

ああ、そうか。

こういうのが、友達なんだな。

*

「いらっしやいませ、立森さん」

クロの家に行くと、いつものように小織さんが出迎えてくれた。

「クロは……」

小織さんは困った様に曖昧に微笑んだ。

「……まだ部屋にいます」

「わかりました」

あの後、クロはまた学校に来なくなってしまった。

事件をかなり引きずっていることは間違いない。

僕は階段をのぼり、クロの部屋のドアをノックした。いつもながら返事はかえってこない。

「クロ、入るぞ」

ドアを開けると、クロが本を読んでいた。

「……」

このところ、クロはずっと同じ本を読み続けている。読み終わっていない筈はない。多分何十回と読み返しているんだろう。

「面白いのか？ それ」

「別に。世界一くだらない本だわ」

それでも、クロはページを捲る手を止めない。
そういえば、遠野と初めて出会った時も、その本を読んでいた。
その本の、題名は。

——『友達』。

エピソード（後書き）

遅筆&バッドエンドですいません……（汗）
ここまで読んで下さり、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5938b/>

Detective Cat -Where is the right answer?-

2010年10月8日14時13分発行